

※以下は、本書内容の一部であり、無断転載等を禁止します。

ウェブ閲覧用ですので、体裁など、実際の書籍とは異なる部分があります。

ソネットハエインデイミオンV

翅に寄せる十九の詩篇

目次

序詩	5
鱗翅	10
雨催い	16
封書	18
舞踊と果实	24
お茶満堂	30
西洋めぐり	32
送信塔のある丘	34

	水上生活者	38
	キュクロープスの花沼	48
	シュノンソーの城の鳥瞰図	56
	あらゆる問いのなかで降誕祭が囁かれる	64
	オルガノン、パストラル	68
	新たなる海流	104
	ソネットへエンディミオン	110
	ダリア褪紅	112
	鳥語	114
	テティス	118
	黙音	120
跋文		122

鱗翅

オルフェとは何の事

いま一度という想いに駆られ

夜の花壇をさまよ

リラの音をさがす

あのひとの歌う寓話のなかで

誓いの詩と

黄色い夢に頬ずりするためには

仲介人が必要だ

舌を垂れた屍が

路上に押し出されている

今夕という蕩けた空間の

湖沼として横たわっている

やがて地平の残光も絶え

逢魔が時も過ぎれば

すべては判明するだろう

ちらちらと短く不規則に明滅する

蛍光灯の下で

床板のしみを爪で剥がしながら

昆虫たちが視た原始から

わずかうごくということ

プリント合板とビニール簾に

観念的に悲しみ

クレーンに吊り下げられている巨塊

その内部にあつて絶え間なく

黒ずんだ泡をたて模造品を生みだす

私の唯一の眠りに今夜も

バナナの葉のかたちをした

幾何学的風は吹き荒れていた

群青色の輪郭線も失った

私には

かたちというものがわからない

くる日もくる日も散漫な語法のハッピーエンドで

濁りの海がはじまるたび

虚ろな目をして子供は喋りはじめたからだ

懐かしい日々

夥しい量の鱗翅たちが消息した

蛍光するひまわりの下で微笑む

瞬間その両目から溢れ出し

剥落する視界のすべてを

意味の言語に代えても

何れの狂気も

随分と間延びした磨滅として

死のごとく自らに復讐した

薄藍の光を透過した

冬の窓から

放たれた群飛を眺めながら

微風に毒散らす

グラスワーク

世界的な流行

透きとおった繭糸の束のなかをはしっていた

シュルレアリスト達の逆説的風景と

そのための新たな修練は

身体の感応に湾曲し

昨日の網膜にはりついていた

いま、運動と時間を内包しながら深遠に

鮮明にそれらを想い起こすには

私はあまりに遠くまで

来てしまっている

草叢を翔び、朽ちた姿のまま

眠りの床に就く

絶望の宵にのみ

いつそう激しく煌めいた

星彩

オルフェウス、あなたの歌声が

箱から流れます

だまし絵のように

稚拙な複合も

続くのです

死骸のように

一見静止と見えるこの肉体に

真新しい困惑の胎動が

再び宿る

透明に角質化したその皮膜の内側では

屈縮した羽の無数の鱗翅が

頻りと光り蠢いている

送信塔のある丘

丘の上、小学校の裏手に、鉄柵に囲われ
ラジオの送信塔が空に向かってまっすぐ
に突き立っていました。鉄塔を根元で支
えている金属製のドーム。ほぼ完全な半
球体の粉つぼい銀白色の輝きが、その内
部に対する私の疑念と奇想を誘って止ま
りません。ずっと昔、そして未来の、遊
技場やら刑場やら。あるいは、巧妙に隠
蔽された私のためのアクアリウム。あれ

これと耽惑しながら入り目を待つ、柵を
乗り越える人の影を幻視する。電磁波と
いう言葉が脳裏にあつて、私の秒針がズ
レはじめ……ときおり遠くで、私たちの
不揃いな生が群なして狂喜し幽かな鳴吠
を響かせます。上空には、ヘリコプター
が音もなく浮かんで、一点に静止したま
ま、一向に飛び去ろうとしません。私の
頭上に、光りある同色の天蓋に――

丘の西側の林には小動物たちの清らかな
遺骸が散乱する窪地があります。湿気を
含みながら積み重なり、なかば泥と化し
た落葉の下に微睡み、なおも冷たい春の
朝露を夢見ているもうひとりの私は、こ

の場所で無量の時間をかけて、わずかず
つ砕かれ、溶かされて……ひそやかに揺
らいでいるようです。ようやくその美し
い丘のすがたは、その内の確かな意味、
まのあたりに、ほのかな光りとなるので
しょうか。はやくここからおりなければ
との思いに、丘をくだり、すこし走り、
息をととのえ、——やがて振り向けば、
いつせいに咲きはじめた桜が、こんもり
盛りあがったその茂み、淡い緑の丘の、
ほぼ全体をまだらに染めて。……不意に
起こる永遠のように、まだ冷たさの残る
三月の風に吹かれています。

水上生活者（連詩の一部抜粋）

（中略）

月 日（）「翡翠」

密封された夏からとじく鉱石——
垂直のGに耐えつつ、慎重にあらゆるダイナミズムを排除しながら

鉱石を描写する方法がないものか

パンパに風が吹きわたり、

長い毛を刈られたウサギが町をひとまわりしてかえってくる

母親はゆっくり立ちあがり、部屋を出ていった

こどもは翡翠――

翡翠をみつけにいった

私はこの小さな国から出たことがないんだ

おお、ジョルジュ もう出発か

密封された夏からとどく

鉱石を描写することができないものか

まるい縁飾りのギターの穴から

何がみえるか

それは熱狂というより狂気と呼ぶにふさわしい

流砂には

スチールカメラとVTRを併用した

球体の裏側から伝達される遙かブエノスアイレスの微弱な電波と交代

そのために私はきよう無数の受信機を購入して――

おお、ジオルジュ　ここはまるできみの歌のようだよ

慎重にあらゆるダイナミズムを排除しながら

密封された夏からとどく鉱石

鉱石を描写する方法がないものか

パンパに風が吹きわたり、長い毛を刈られたウサギは町をひとまわり――

こども達は連れだつて翡翠をみつけにいった

(後略)

オルガノン、パストラル（抜粋）

organon

（中略）

pastoral

冷えはじめた大地の果て

地平に点在する遙かな山稜から

雲がうまれ

目前に穏やかに広く

蒼い湖面はふたたび煌めきに満ちて――

回想のような魅惑で背後から

囁る姿なき鳥たちが

震わせる水泡に

舳先を向け

ボートを漕ぎだす――

かつて曙光に反照した 終日の

所以なき靄にも別れを告げ

その水底

凄まじいほどの勢い、しぶとさで

銀の酒杯に溜飲を酌み交わし

浅はかな話し声、笑い声が

崇高な鳥たちの囀りを 巧妙に

覆い隠そうとする饗宴に

永遠に決別する――その時こそ

しなやかなファウヌスの笛の音は

穏やかな清流の

川底にゆれる水草のように

髪を靡かせながら

ためらいがちにうつむく 祝福の

セレネとともに上昇する

重々しく流れ

途絶えることのない黒雲が

その神秘的な乳白色の輝きを 陰鬱に

覆い尽くそうとする夜にも

荒々しくうちつけ

止むことのない暴雨が

その高貴な洋紅色の仄めきを 執拗に

かき消そうとする夜にも

密やかなセレネの溜息は

悠久の疲弊に傾いた軒下に 横たわる

牧人とともに上昇する

(後略)

ソネットハエンデイミオン
翅に寄せる十九の詩篇

1991年7月30日発行

著者 佐久間紀次

発行所 沖積舎